Column 佐賀平野の干拓集落の景観を観察して

藤永　豪（COE研究員・PD）

年明け早々、有明海沿岸の干拓集落へ景観観察に出かけた。自ら景観を撮影することで、今後の「澁澤写真」の分析にむけて、何かしらヒントを得られないかと考えたからである。周知のように、有明海沿岸は中世より干拓が行われ、現在でもこれに由来する地名が残っている。佐賀県内では「搦（からみ）」・「籠（こもり）」、福岡・熊本両県では「開（ひらき）」・「新開（しんびらき）」、長崎県では「籠」・「開」といった地名が存在する。

今回の景観観察では、佐賀平野の干拓集落を巡った。地元の高校以来の友人に頼み込んで車を出してもらい、私自身は図々しくも、カメラと2万5千分の1地形図を手に助手席におさまり、偉そうに友人に指示を出しながら沿線の景観を撮影した。撮影のポイントは、前夜、布団の中で地形図を眺めながらある程度決めていた。前述した「搦」・「籠」の地名は第二次世界大戦以前の干拓集落に多くみられるため、現在の海岸線より多少内陸に入った地域に分布する。一方、戦後の干拓集落は、当然ながら海岸線に沿って分布し、「搦」等の地名はみられない。しかも、それぞれが塊村と列村という異なる形態を示しており、その景観上の違いを撮影しようと考えた。

写真1は東与賀町の搦集落の家屋景観である。入母屋造の家屋が集まり、小塊村を形成している。近世から戦前にかけて成立した干拓集落の典型的な景観事例である。しかしながら、近年では佐賀市や久留米市などの近隣の都市部へ通勤する住民が流入し、新たな住宅景観が作り出されている（写真2）。このように佐賀平野には新旧混合の集落景観が広がる。これに対し、写真3は戦後造成された干拓地で、白石町新拓集落の景観である。幅員の広い直線道路に沿って、切妻造の似たような家屋が並んでいる。極めてシンプルな集落景観である。戦後の干拓事業は食糧増産と開拓を目的とし、国や県が中心となって進められた。したがって、この景観は効率性や合理性など経済性に重きをおいた農業政策の中で形成されたものと考えられる。

家屋と集落景観だけの比較だが、同じ干拓集落でも、事業主体、政策、経済状況、歴史的経緯など様々な要因が景観の特徴と差異を生み出していることに気づく。しかも、新興住宅地が出現するなど、絶えず景観は時代の波にさらされており、変化し続けていることを痛感させられる。このことは他の景観からも読み取れた。

この他に、景観というわけではないが、一つおもしろい写真が撮れた。写真4は新拓集落の北側を流れる用水路の傍に立てられた看板である。ここには、ジャンボタニシ駆除のために放流されたスッポンの捕獲を禁止する文章が記載されている。ジャンボタニシは学名をスクミリンゴガイといい、南米から食用として輸入されたが、稲苗を食べるために、農家はその駆除に苦慮している。その対策としてスッポンが放流されたわけである。この写真の中の一枚の看板から、地域における生態系の変化と人の関わりを垣間みることができる。

今回の景観観察が、「澁澤写真」の景観分析において、どれだけ役立つのか、はなはだ心もとない。しかし、一枚の写真の中に切り取られた景観には膨大な量の情報が隠されており、それを読み解く困難さとおもしろさを改めて認識することができた。

写真1

東与賀町搦集落の家屋景観

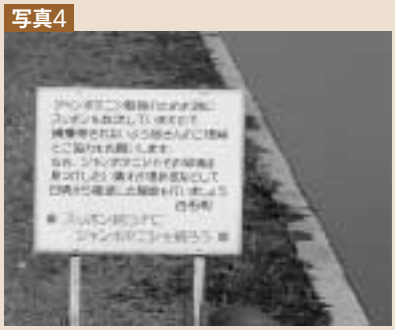
写真2

搦集落に隣接する新興住宅地

写真3

白石町新拓集落の景観

写真4



スッポンの捕獲禁止を呼びかける看板